

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3370105391		
法人名	有限会社 オフィスフジワラ		
事業所名	グループホーム あうん		
所在地	岡山県岡山市東区松新町82-6		
自己評価作成日	令和4年1月7日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/33/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JizyosyoCd=3370105391-00&ServiceCd=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社One More Smile		
所在地	岡山県玉野市迫間2481-7		
訪問調査日	令和4年2月10日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

事業所として次の理念を大事にしている。◎利用者一人ひとりが、居心地よく自分らしくしていただける生活の支援を行う。◎家族の方とは、日頃から意思の疎通を心がけ、安心と満足を感じていただく。◎家族の方には、共通の目的を持った理解者となっていたく。

誇れる点として、職員の定着率の良さを挙げたい。開設18年を経過した現在、勤務歴10年を超える職員は全職員の3割を占め、勤務歴7年以上の職員は5割以上を占める。ベテラン職員と新しい職員の混在であるが、これまで事業所が大切にしてきた入居者一人ひとりに対する細やかな心くばりができ、困難な事例にぶつかることがあっても、チームワークで乗り越えていくことのできる力を感じる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「人を幸せにする福祉、志のあるところに志が集まる」事業所を目指し、日々の支援に取り組んでいる。例えば、以前、当該事業所に母親が入所し、看取りをしてもらった職員が居る。その際、家族の立場だった自分を親身になって支えてくれた。今度は、職員として自分も利用者や家族に寄り添いたいとの思いから介護職に転身した。また、「管理者と一緒に働きたい」と職員になった人も居る。管理者は、地域の中で認知症への理解を広めるための活動もしている。そして、「あうん」では、管理者も職員も利用者の笑顔を見るためにどうしたら良いかを常に考え、日々支援に努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/>	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/>	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/>	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	新型コロナウイルス感染予防のため、家族との面会や交流が制限あるものになっているが、理念に基づいての実践はできていると考える。	職員は、「利用者がどうしたらその人らしく暮らせるのか」「家族はどんな気持ちでいるのか」を常に考えながら関わっている。毎月家族に送付している便りは、各職員の気持ちが言葉で表現されていた。その便りからも、理念が職員に浸透していると感じられた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	事業所の存在は地域の社会資源と捉えられていると思う。昨年4月以降のコロナ禍の中、地域住民のボランティアや小中学校との交流は中止となっているが、利用者にとって必要な整髪などは感染予防をしながら地域の美容室の方の訪問を継続している。	管理者は、認知症への理解を広める活動を小学校等で実施している。その活動は、認知症サポーターキャラバンの基盤とも言える。現在、中止となっている様々なボランティアの受け入れも併せ、再開できる日を待ち望んでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍の中、昨年に引き続き、小中学生に認知症の理解を広げる機会は中止されたが、地域に住む方から、認知症や介護に関する相談を受けることは多い。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍の中、事業所の中での開催ではなく事業所外の別室で、二ヶ月に一回開催できた。メンバーの広がりはないが、サービスの実際を報告し、率直な意見交換ができていた。	運営推進会議を延期する事業所が多い中、敷地内にある別棟で開催し、そこでの意見をサービス向上に活かしている。市の介護ロボット普及推進事業の一つとして、導入した事例等を報告した。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域包括支援センター担当者には、毎回、運営推進会議への参加を通して事業所の実情を知ってもらったり、地域の情報なども交換している。今年度は「岡山市介護ロボット利用普及事業」の利用を試みた。	運営推進会議での報告や情報交換以外にも、市町村との繋がりは多い。また、事業所には、成年後見制度を利用している人が数名いる。市の担当者と協力しながら、事業所のネットワークを活用し、地域の社会資源に貢献している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	今年度も身体的拘束等の適正化のための職員研修を2回行った。日常的に拘束についての話題を取り上げているので、理解できている職員は多い。玄関の施錠はしているが、施錠していても利用者の行動の自由を妨げないケアに取り組んでいる。	身体拘束について、色々な側面からの研修が行われている。普段の生活の中でも話題に挙げ、拘束にしないケアに努めている為、職員の理解も進んでいる。訪問日も、スピーチロックにならないよう意識した言葉掛けとなっていた。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員研修を行っている。折々に身体の状態を観察し、傷や皮下出血を発見した際には原因究明に努め、介護方法の工夫などを行っている。言葉による不適切ケアには更に注意したい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	数名の利用者が成年後見制度を活用している。個々に応じて支援している。「日常生活自立支援事業」についても研修の中で簡単に触れることはあったが、十分な理解には繋がっていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は丁寧な説明を心がけ、理解・納得をしていただいている。また、契約の前には、重要事項説明書にて施設やサービスの内容など詳細な説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者からは日々の関わりの中で、家族からは来所時や個別の連絡の時に気軽に話していただけるよう務めている。また、地域運営推進会議が外部者に表す機会となっている。	「家族もチームの一員」という姿勢で、信頼関係を築いている。事業所としては提供しない食事メニューでも、家族が差し入れた際には、気持ちよく受け入れるなど、利用者・家族ともに希望を出しやすい雰囲気である。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回、ユニットごとにミーティングを行い、意見交換を行っている。随時、意見や要望を聴く機会があり、聞いた意見や提案は、代表者に報告し反映できるように努めている。	管理者は、働きやすい環境作りに心を配り、さらに職員個々についても常に気にかけている。管理者や職員の言葉から、互いの思いやりが感じられた。出来るだけ希望の休みが取れるように配慮している。	管理者と職員の信頼関係は強く、信念に添って利用者・家族を支援していこうという気概が感じられる。管理者は「これで十分」ではなく、職員個々と面談して、より良い関係作りをしていこうと考えている。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個々の能力や勤務状況に応じた給与水準の整備に努めている。また、職員各自の勤務希望(休み希望など)を最大限尊重している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者に多くを任せているが、資格取得への挑戦や研修などに参加する事への援助は惜しまない。今年度も、事業所内研修の年間計画を立て実施している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者が行っている。区内の同業者とのネットワークづくり・相互訪問に取り組んだことがあり、交流は続いている。得た情報を当事業所のサービスの質の向上に活かすこともある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前の面接や聞き取り、家族・関係機関からの情報提供によりサービス利用に至った状況・状態を把握し、入居後はチームで日々情報共有しながら、安心して生活していただけるよう関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	最初の相談時より、家族の方の困っていることや不安、要望を丁寧に伺うよう努めている。その後、入所に至るまでも、来訪時や電話連絡時に会話を重ねながら関係づくりを図り、安心して利用してもらうように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	見学や入所相談の中で、家族が今困っていることや不安、悩みに耳を傾けながら、必要であろう情報を提供したり、他のサービス利用を紹介するなど支援に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自分で出来ることは、できるだけ本人にしてもらうことを大切にしている。日々の生活の中で、職員と一緒に家事や作業などをしながら共に過ごす場面もあり、「ありがとう」や「助かりました」の言葉を大切にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	理念にも掲げているように、事業所にとって大切にしている事である。職員にも、大切な事としての自覚があり、家族とのコミュニケーションや関係づくりに努めている者がほとんどである。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの人や場所との関係継続の支援には努めている。コロナ禍の中、馴染みのある場所へ出かけることは出来なかったが、制限を設けながらであるが、家族や親族の方との交流の支援は出来た。	日常的な買い物などの機会は減っているが、家族や親族との電話、手紙のやり取りなどは継続している。また、季節の花を見るために外出するなど出来る範囲での支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者個々の性格や互いの関係性を把握し、時には職員が介入しながら、利用者同士の関わり合いが持てるように努めている。利用者同士、支え合っている関係も存在している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後も、本人や家族と築いた関係を大切にしている。また、退所された方の家族が訪ねて来てくださったり、新たな相談を伺う事例もある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段の生活の会話の中で希望や意向を聞き取ったり、表情などから察知したりしている。自ら表出できない方については、出来るだけ本人の立場になってくみ取るようにしている。	利用者が何をしたら喜ぶのかを常に念頭に置いて接している。認知症が重度になる以前から入所している利用者が多いことも、考え方や思いを推察する一助となり、利用者の笑顔も多く見られている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所以前の生活歴は、本人・家族・担当ケアマネなどからの情報収集してフェイスシートに記載し、入居後は、本人との会話の中から情報収集し、職員間で情報を共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日、日勤・遅出・夜勤出勤時の際の申し送りや一人ひとりの状態などを引き継ぎながら現状把握に努めている。月1回開催のミーティングも把握する機会である。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々アセスメントの記録があり、必要時にはカンファレンスにてモニタリングを行い、現状に即した介護計画を作成している。また、できるだけ、本人や家族の希望や思いを聞き取り、それを反映したプラン作りに努めている。	日々の状況や利用者・家族の希望を、出来るだけ細やかに共有し、記録している。そこから抽出した事柄について検討し、実践結果を持ち寄り、改善へと導く「チームあうん」のPDCAサイクルができています。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子やケアの実践・結果などは個別の介護記録に具体的に記録するようにしている。職員間で共有しておきたい事柄は引継ぎ書や連絡ノートに記入されることが多く、申し送りやミーティング、カンファ時に情報共有し、実践や介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時々生まれる状況やニーズに対しては、チームで話し合い検討したり、家族や親族などの協力者とも相談するなどして柔軟に対応するように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	毎月、地域のボランティアの方々と開催している「お花を楽しむ会」や「音楽広場」は、楽しみや活性を取り戻す時間となっているが、コロナ禍の中、昨年に引き続き中止している。が、美容院の訪問サービスは感染予防に配慮しながら継続している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時、かかりつけ医の希望を伺うが、現在は全員が同じかかりつけ医(主治医)の往診を受けている。変調時には、主治医に報告・連絡を行い、指示を受けたり、必要時には受診同行したり、臨時の往診を受けることもある。	かかりつけ医に定期・適時に往診・診察を受けている。他科の専門医の受診に同行することもある。薬剤師には、薬が飲みにくい等の相談の助言をもらっている。週に一度、訪問看護も実施されている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の訪問看護を利用。訪問時には情報提供書を用意し、気になる事柄や状態があれば相談しアドバイスを受けている。かかりつけ医療機関の看護職とも蜜に連絡・相談を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には同行し情報提供を行い、家族とともに医師からの説明を受けている。しかし、コロナ禍の中、家族は勿論、ホーム職員も面会出来ず、これまでのような細やかな情報入手が難しくなった。早期退院に向けて、病院関係者との情報交換に務めるも退院に至らなかった事例があり、残念である。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時、「重度化した場合における対応および看取りに関する指針」をもとに、事業所の方針や事業所としての支援内容を説明している。実際の看取りの支援が始まる際には、主治医との連携を元に十分な説明を行い、その後本人・家族の希望や意向を確認しながらの支援に取り組んでいる。	事業所は、本人・家族の希望により看取りを行っている。その際、家族の支援にも多大に尽力している。母親が当事業所で看取りをしてもらった際、力強く支えてもらった経緯に感謝し、職員となった者もいる。今は、事業所の一員として利用者と家族の支援に努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応については事業所内研修を行ったり、事故発生時には、その都度、初期対応の方法などを皆で再確認している。しかし、実践力が身につけているか?には不安がある職員がいる。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	水害(洪水)については、8月に新たに「社会福祉施設避難確保計画」を作成し、事業所内研修において内容を確認した。火災の避難訓練は一年に一度実施している。	浸水時等、2階へ垂直避難するようにしているが、利用者個々について、階段を上がれるか否かを再確認し、その後昇降訓練も行っている。東消防署からの救命救急講習や、職員二人で利用者を抱えての避難訓練なども行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日頃の言葉のかけ方や声の大きさ、自尊心への配慮について、気をつけて対応しているという評価は多い。自らの対応について振り返る機会には必要と考える。	職員がそれぞれ実施している自己評価でも、「利用者の自尊心を大切に言葉かけを行っている。」という評価が多い。自己評価の実施は、職員が自らを振り返る機会となっている。一人ひとりの姿勢が、事業所の質を高めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自分で選択できるように選択肢を複数提供したり、分かりやすい短い言葉で話しかけたりするなど気をつけている。聴き待つ姿勢が大切という評価もある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの体調や状況、ペースに合わせて柔軟に対応している。自らの希望を発することができる方は少ないが、耳にしたり感じとった際には支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問髪カットを導入し、自分で希望を言える方は好みの髪型にしてもらっている。女性利用者には誕生日や行事の折、化粧をしたりなど、おしゃれを楽しむ支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	介護職兼栄養士が、希望や季節感を大切に食事が楽しくなる献立づくりに努めている。誕生日には、本人から聞き取った「食べたいもの」を用意している。また、利用者と職員と一緒に食事を摂り、準備や片づけなども利用者のできる事と一緒にやっている。	栄養士の資格を持つ介護職員が、献立を作成している。栄養価は勿論だが、食材の大きさや硬さもその人に合わせた対応をしている。美味しい食事は勿論、利用者や職員にも好評である。誕生日には、本人が食べたいという献立と手作りケーキで祝い喜ばれている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分摂取量を記録し、確保の確認と意識づけを行っている。個々の嗜好や嚥下状態に合わせての献立づくりや形状の工夫、量の調整を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアは、毎食後、出来ている。また、必要に応じて、訪問歯科診療や歯科衛生士による訪問口腔ケアを受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレでの排泄、できる限りの布パンツ使用を基本姿勢としている。個々の排泄のサインや排泄パターンを見てのトイレ誘導を行い、本人に負担のない支援を心掛けている。	生活習慣誘導や、利用者からのちょっとしたサインなどで、トイレへ誘導している。また、利用者の経済的負担を考慮し、布パンツの使用を心掛けたり、排泄ケア用品の使用感・価格を調査したりするなど、利用者の目線に立った支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	スムーズな排便は日々の課題である。個々の排便状態を把握し、便秘予防のための水分摂取や乳製品摂取などに取り組み、温浴法や入浴、マッサージ等で便秘解消にも努めている。便秘薬でコントロールすることも多い。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	往診の時間や行事の都合で入浴の曜日や時間帯を職員が決めることは多いが、無理強いはせず、本人の希望を尊重しながらの支援を心がけている。入浴時は、安心して気持ちよく過ごせるよう支援している。	入浴は、利用者一人ひとりと関わる機会と捉えている。ゆったりと流れる時間の中で、コミュニケーションを楽しみながら、心地よさを味わってもらっている。脱衣室も十分に暖めて、ヒートショックを防いでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その時々体調や状態に応じて、また、ご本人のペースに合わせての休息の支援はできている。安眠できるよう、寝る前の足浴や湯たんぽの用意、温かい飲み物の提供などの支援をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の薬情報はファイルし、いつでも確認できるようにしている。服薬の変更や追加があった際には介護記録や連絡ノートに記し、その後の様子観察を行なうようにしている。かかりつけ薬局とは情報共有し、何かあれば報告や相談を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	コロナ禍の中、楽しみや気分転換の機会であった毎月の行事は中止しているが、日々の生活の中で懐かしい歌を歌ったり風船バレーやゲームを楽しんだりしている。また、自分が出来る仕事や役割を求めている方には、タイミングを見ての提供の支援を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍の中、外出は控える一年であったが、ドライブがてら、3月の梅、4月の桜、11月の秋桜など楽しめた。また、白髪染めをしたいというご本人の希望に、近い親族の方の協力を得て、近隣の美容院に出かけている事例がある。	コロナ禍において、自由な外出には制限があるが、敷地内の散歩等は日常的に実施されている。また、親族の協力の下、本人の希望で美容院に出かけて毛染めされている人もいます。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご自分ではお金の管理が出来なくなってしまった方がほとんどであるが、お金を所持している利用者はいる。入居時、ご本人がお金を所持することについて、ご家族と一緒に検討し、所持することの意味を確認した上で支援している例がある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	好きな時に本人自ら電話をしているのは1名のみ。ご家族や親戚の方から電話がかかり、職員がご本人に取り次ぐことが多い。お孫さんやひ孫さんから手紙が届くこともあり、楽しい時になっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	それぞれのユニットごとに工夫し居心地のよい空間づくりがされている。不具合があれば、ユニットのチーム全体で考え、柔軟に空間づくりを行なっている。ホール壁面への飾り付けや季節の草花を活けて季節を感じる事が出来る工夫も出来ている。	古いミシンや調度品が、懐かしさを醸している。廊下には、移動図書から借りた本が置かれ、木製のベンチで読書も出来る。柔らかい日差しが入る。壁面は春らしい色彩で、季節を感じる。また、日にちや場所がわかりにくい見当識に配慮した表示がなされている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファやテーブルの配置を工夫したり、スクリーンを利用することで、共有空間の中での一人一人の居場所を作ることはできている。気の合う方同士が過ごせる空間づくりや、反対にトラブル回避のための空間づくりも工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時に、使い慣れたものや馴染みのある家具を持ち込んでもらうようにしている。一方、利用者によっては物が無い方が落ち着いて休むことができる方もいるため、本人の様子や状態を見ながら、安心して安全な空間づくりを工夫している。	使い慣れた物や、馴染みのある物が持ち込まれている。小石に興味がある人は、散歩に出る度に拾って帰り、宝石のように箱に並べて、目を細めて眺めている。また、部屋毎に違うタペストリーがかけられて、それぞれの個性が表されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の表札やトイレの目印など、わかる工夫をしている。一人ひとりの移動力や行動を考慮して、安全で分かりやすい環境づくりに努めている。		

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3370105391		
法人名	有限会社 オフィスフジワラ		
事業所名	グループホーム あうん		
所在地	岡山県岡山市東区松新町82-6		
自己評価作成日	令和4年1月7日	評価結果市町村受理日	

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

事業所として次の理念を大事にしている。◎利用者一人ひとりが、居心地よく自分らしくしていただける生活の支援を行う。◎家族の方とは、日頃から意思の疎通を心がけ、安心と満足を感じていただく。◎家族の方には、共通の目的を持った理解者となっていたく。
 誇れる点として、職員の定着率の良さを挙げたい。開設18年を経過した現在、勤務歴10年を超える職員は全職員の3割を占め、勤務歴7年以上の職員は5割以上を占める。ベテラン職員と新しい職員の混在であるが、これまで事業所が大切にしてきた入居者一人ひとりに対する細やかな心くばりができ、困難な事例にぶつかることがあっても、チームワークで乗り越えていくことのできる力を感じる。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kajokensaku.mhlw.go.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&JizyosyoCd=3370105391-00&ServiceCd=320
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社One More Smile		
所在地	岡山県玉野市迫間2481-7		
訪問調査日	令和4年2月10日		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	新型コロナウイルス感染予防のため、家族との面会や交流が制限あるものになっているが、理念に基づいての実践はできていると考える。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	事業所の存在は地域の社会資源と捉えられていると思う。昨年4月以降のコロナ禍の中、地域住民のボランティアや小中学校との交流は中止となっているが、利用者にとって必要な整髪などは感染予防をしながら地域の美容室の方の訪問を継続している。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍の中、昨年に引き続き、小中学生に認知症の理解を広げる機会は中止されたが、地域に住む方から、認知症や介護に関する相談を受けることは多い。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍の中、事業所の中での開催ではなく事業所外の別室で、二ヶ月に一回開催できた。メンバーの広がりはないが、サービスの実際を報告し、率直な意見交換ができています。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域包括支援センター担当者には、毎回、運営推進会議への参加を通して事業所の実情を知ってもらったり、地域の情報なども交換している。今年度は「岡山市介護ロボット利用普及事業」の利用を試みた。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	今年度も身体的拘束等の適正化のための職員研修を2回行った。日常的に拘束についての話題を取り上げているので、理解できている職員は多い。玄関の施錠はしているが、施錠していても利用者の行動の自由を妨げないケアに取り組んでいる。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員研修を行っている。折々に身体の状態を観察し、傷や皮下出血を発見した際には原因究明に努め、介護方法の工夫などを行っている。言葉による不適切ケアには更に注意したい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	数名の利用者が成年後見制度を活用している。個々に応じて支援している。「日常生活自立支援事業」についても研修の中で簡単に触れることはあったが、十分な理解には繋がっていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は丁寧な説明を心がけ、理解・納得をしていただいている。また、契約の前には、重要事項説明書にて施設やサービスの内容など詳細な説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者からは日々の関わりの中で、家族からは来所時や個別の連絡の時に気軽に話していただけるよう務めている。また、地域運営推進会議が外部者に表す機会となっている。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回、ユニットごとにミーティングを行い、意見交換を行っている。随時、意見や要望を聴く機会があり、聞いた意見や提案は、代表者に報告し反映できるように努めている。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個々の能力や勤務状況に応じた給与水準の整備に努めている。また、職員各自の勤務希望(休み希望など)を最大限尊重している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者に多くを任せているが、資格取得への挑戦や研修などに参加する事への援助は惜しまない。今年度も、事業所内研修の年間計画を立て実施している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者が行っている。区内の同業者とのネットワークづくり・相互訪問に取り組んだことがあり、交流は続いている。得た情報を当事業所のサービスの質の向上に活かすこともある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前の面接や聞き取り、家族・関係機関からの情報提供によりサービス利用に至った状況・状態を把握し、入居後はチームで日々情報共有しながら、安心して生活していただけるよう関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	最初の相談時より、家族の方の困っていることや不安、要望を丁寧に伺うよう努めている。その後、入所に至るまでも、来訪時や電話連絡時に会話を重ねながら関係づくりを図り、安心して利用してもらうように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	見学や入所相談の中で、家族が今困っていることや不安、悩みに耳を傾けながら、必要であろう情報を提供したり、他のサービス利用を紹介するなど支援に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自分で出来ることは、できるだけ本人にしてもらうことを大切にしている。日々の生活の中で、職員と一緒に家事や作業などをしながら共に過ごす場面もあり、「ありがとう」や「助かりました」の言葉を大切にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	理念にも掲げているように、事業所にとって大切にしている事である。職員にも、大切な事としての自覚があり、家族とのコミュニケーションや関係づくりに努めている者がほとんどである。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの人や場所との関係継続の支援には努めている。コロナ禍の中、馴染みのある場所へ出かけることは出来なかったが、制限を設けながらであるが、家族や親族の方との交流の支援は出来た。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者個々の性格や互いの関係性を把握し、時には職員が介入しながら、利用者同士の関わり合いが持てるように努めている。利用者同士、支え合っている関係も存在している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後も、本人や家族と築いた関係を大切にしている。また、退所された方の家族が訪ねて来てくださったり、新たな相談を伺う事例もある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段の生活の会話の中で希望や意向を聞き取ったり、表情などから察知したりしている。自ら表出できない方については、出来るだけ本人の立場になってくみ取るようにしている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所以前の生活歴は、本人・家族・担当ケアマネなどからの情報収集してフェイスシートに記載し、入居後は、本人との会話の中から情報収集し、職員間で情報を共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日、日勤・遅出・夜勤出勤時の際の申し送りや一人ひとりの状態などを引き継ぎながら現状把握に努めている。月1回開催のミーティングも把握する機会である。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々アセスメントの記録があり、必要時にはカンファレンスにてモニタリングを行い、現状に即した介護計画を作成している。また、できるだけ、本人や家族の希望や思いを聞き取り、それを反映したプラン作りに努めている。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子やケアの実践・結果などは個別の介護記録に具体的に記録するようにしている。職員間で共有しておきたい事柄は引継ぎ書や連絡ノートに記入されることが多く、申し送りやミーティング、カンファ時に情報共有し、実践や介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時々生まれる状況やニーズに対しては、チームで話し合い検討したり、家族や親族などの協力者とも相談するなどして柔軟に対応するように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	毎月、地域のボランティアの方々と開催している「お花を楽しむ会」や「音楽広場」は、楽しみや活性を取り戻す時間となっているが、コロナ禍の中、昨年に引き続き中止している。が、美容院の訪問サービスは感染予防に配慮しながら継続している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時、かかりつけ医の希望を伺うが、現在は全員が同じかかりつけ医(主治医)の往診を受けている。変調時には、主治医に報告・連絡を行い、指示を受けたり、必要時には受診同行したり、臨時の往診を受けることもある。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の訪問看護を利用。訪問時には情報提供書を用意し、気になる事柄や状態があれば相談しアドバイスを受けている。かかりつけ医療機関の看護職とも蜜に連絡・相談を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には同行し情報提供を行い、家族とともに医師からの説明を受けている。しかし、コロナ禍の中、家族は勿論、ホーム職員も面会出来ず、これまでのような細やかな情報入手が難しくなった。早期退院に向けて、病院関係者との情報交換に務めるも退院に至らなかった事例があり、残念である。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時、「重度化した場合における対応および看取りに関する指針」をもとに、事業所の方針や事業所としての支援内容を説明している。実際の看取りの支援が始まる際には、主治医との連携を元に十分な説明を行い、その後も本人・家族の希望や意向を確認しながらの支援に取り組んでいる。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応については事業所内研修を行ったり、事故発生時には、その都度、初期対応の方法などを皆で再確認している。しかし、実践力が身に付いているか？には不安がある職員がいる。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	水害(洪水)については、8月に新たに「社会福祉施設避難確保計画」を作成し、事業所内研修において内容を確認した。火災の避難訓練は一年に一度実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日頃の言葉のかけ方や声の大きさ、自尊心への配慮について、気をつけて対応しているという評価は多い。自らの対応について振り返る機会が必要と考える。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自分で選択できるように選択肢を複数提供したり、分かりやすい短い言葉で話しかけたりするなど気をつけている。聴き待つ姿勢が大切という評価もある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの体調や状況、ペースに合わせて柔軟に対応している。自らの希望を発することができる方は少ないが、耳にしたり感じとった際には支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問髪カットを導入し、自分で希望を言える方は好みの髪型にしてもらっている。女性利用者には誕生日や行事の折、化粧をしたりなど、おしゃれを楽しむ支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	介護職兼栄養士が、希望や季節感を大切に食事が楽しくなる献立づくりに努めている。誕生日には、本人から聞き取った「食べたいもの」を用意している。また、利用者と職員は一緒に食事を摂り、準備や片づけなども利用者のできる事を一緒にやっている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分摂取量を記録し、確保の確認と意識づけを行っている。個々の嗜好や嚥下状態に合わせての献立づくりや形状の工夫、量の調整を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアは、毎食後、出来ている。また、必要に応じて、訪問歯科診療や歯科衛生士による訪問口腔ケアを受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレでの排泄、できる限りの布パンツ使用を基本姿勢としている。個々の排泄のサインや排泄パターンを見てのトイレ誘導を行い、本人に負担のない支援を心掛けている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	スムーズな排便は日々の課題である。個々の排便状態を把握し、便秘予防のための水分摂取や乳製品摂取などに取り組み、温罨法や入浴、マッサージ等で便秘解消にも努めている。便秘薬でコントロールすることも多い。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	往診の時間や行事の都合で入浴の曜日や時間帯を職員が決めることは多いが、無理強いせず、本人の希望を尊重しながらの支援を心がけている。入浴時は、安心して気持ちよく過ごせるよう支援している。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その時々体調や状態に応じて、また、ご本人のペースに合わせての休息の支援はできている。安眠できるよう、寝る前の足浴や湯たんぽの用意、温かい飲み物の提供などの支援をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の薬情報はファイルし、いつでも確認できるようにしている。服薬の変更や追加があった際には介護記録や連絡ノートに記し、その後の様子観察を行なうようにしている。かかりつけ薬局とは情報共有し、何かあれば報告や相談を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	コロナ禍の中、楽しみや気分転換の機会であった毎月の行事は中止しているが、日々の生活の中で懐かしい歌を歌ったり風船バレーやゲームを楽しんだりしている。また、自分が出来る仕事や役割を求めている方には、タイミングを見ての提供の支援を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナ禍の中、外出は控える一年であったが、ドライブがてら、3月の梅、4月の桜、11月の秋桜など楽しめた。また、白髪染めをしたいというご本人の希望に、近しい親族の方の協力を得て、近隣の美容院に出かけている事例がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご自分ではお金の管理が出来なくなってしまった方がほとんどであるが、お金を所持している利用者はいる。入居時、ご本人がお金を所持することについて、ご家族と一緒に検討し、所持することの意味を確認した上で支援している例がある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	好きな時に本人自ら電話をしているのは1名のみ。ご家族や親戚の方から電話がかかり、職員がご本人に取り次ぐことが多い。お孫さんやひ孫さんから手紙が届くこともあり、楽しい時になっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	それぞれのユニットごとに工夫し居心地のよい空間づくりができています。不具合があれば、ユニットのチーム全体で考え、柔軟に空間づくりを行なっている。ホール壁面への飾り付けや季節の草花を活けて季節を感じる事が出来る工夫も出来ている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファやテーブルの配置を工夫したり、スクリーンを利用することで、共有空間の中での一人一人の居場所を作ることはできている。気の合う方同士が過ごせる空間づくりや、反対にトラブル回避のための空間づくりも工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時に、使い慣れたものや馴染みのある家具を持ち込んでもらうようにしている。一方、利用者によっては物が無い方が落ち着いて休むことができる方もいるため、本人の様子や状態を見ながら、安心して安全な空間づくりを工夫している。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の表札やトイレの目印など、わかる工夫をしている。一人ひとりの移動力や行動を考慮して、安全で分かりやすい環境づくりに努めている。		